

# 仁和寺西端域の子院等小考

津々池 惣一

## 1. はじめに

2000年、7月から10月にかけて史跡御室仁和寺境内西端部の調査に携わる機会があった。これは新宗務庁舎建築工事に伴うものであった。

調査の結果、平安時代から江戸・明治時代までの遺構を検出した。とりわけ、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての寺域を画すると考えられる門跡を伴う築地状施設や側溝と想定される遺構を検出した<sup>(1)</sup>。

これを機会に仁和寺南西部の寺域とその近辺の平安時代後期～鎌倉時代前期を中心とした子院などの配置について少し検討してみた。

仁和寺境内の発掘調査はこれまで4回あった<sup>(2)</sup>。また、研究については杉山信三、福山敏男両氏らの研究に詳しい。近年では古藤真平氏の研究が両氏の研究成果をふまえて、『仁和寺史料』などをベースにして、仁和寺及び子院の創建時期、故地、寺域などについて詳しい<sup>(3)</sup>。

今般において扱うテーマについての史料は、『仁和寺史料』寺誌編一・二などをベースにして仁和寺の子院などを扱うので、また、異なる史料の表記による煩雑さを避けるにも、文献史料の扱いも基本的には古藤氏の扱い方に準拠して進めていく<sup>(4)</sup>。

## 2. 検出遺構の概略

仁和寺の寺域については創建時の故地はいうまでもなく、西端部域の本寺・本坊内の観音院や南御室の位置、あるいは隣接する北院・成就院、更には四円寺の円宗寺などの寺域など不明な点が多い。それ故、寺域の変遷との絡みで、本稿において主要なテーマとする平安時代後期から鎌倉時代の遺構だけではなく、敢えて近世・近代の遺構の概説まで含めた。

検出した遺構は概ね江戸時代末期から明治時代、江戸時代後期、江戸時代中期、江戸時代前期、平安時代後期から鎌倉時代前期に属するものであった。

江戸時代末以降の調査では井戸跡、築地塀基礎跡、土壇、建物基礎跡などを検出した。井戸跡、築地塀基礎跡は明治20年の『罹災之図』<sup>(5)</sup>に記録されているものである。

江戸時代後期の遺構には特記すべきものはみられないが、造成作業にともなう整地された跡をみつけている。

江戸時代中期の遺構には路面跡と井戸状遺構などがある。調査地西端に近い位置で南北に走る石敷の路面とそれに伴う両側溝を検出した。路面の幅は2.5m～3.0mで南北10.0m以上ある。側溝は幅0.5m前後である。この遺構の直下に位置する江戸時代前期（17世紀後半）の溝が埋まった

後に出来たものであり、また天和三年（1683）の『仁和寺伽藍総絵図』<sup>(6)</sup>には、本坊南側築地の西端付近に「裏門」が記載されている。したがって、検出した路面は天和年間には存在していたものと思われる。路面は裏門より双ヶ岡方向に延びる南北道路と同一線上に近い位置にあり、裏門から境内の堂宇への通用路として機能していたと考えられる。

江戸時代前期までの遺構においては、調査地西端において試掘段階から指摘されていた築地状施設が検出された。調査地西端から1.0m東へ、2.0m前後の幅で南北方向に土盛状の築地状施設とその内外の側溝が検出された。側溝は内側が1.8m、外側が1.8m以上ある。

南北の築地想定地には径0.3m大の柱穴列があり、少なくとも2回の立替が認められる。また、南端に近いところには暗渠状遺構が検出されている。両側溝は出土した遺物から江戸時代17世紀後半までには埋没しており、築地に関連する遺構は少なくとも天和三年（1683）の『仁和寺伽藍総絵図』までには移築されている。すなわち、調査地西端より6.4m西にある現在の築地の位置である。

平安時代後期～鎌倉時代前期の遺構については、江戸時代前期の暗渠状遺構の下から直径1.0m、柱当り0.4mを測る柱穴と考えられる遺構が検出された。また、北側へ4.2mのところでも同様の遺構が検出されている。また、この遺構はそれぞれ切り合い関係を持つ小柱穴（径0.5m）を伴っており、2時期あることになる。更にこの柱穴を伴う形で南北の築地状施設がある。そして、その想定地の東西で平安時代後半から鎌倉時代前半代に収まる遺物を含んだ両側溝を検出した。すなわち、柱穴遺構が築地状施設想定地に同一方向であること、両側溝があることから、門を伴う築地状施設を想定したい。時代は、平安時代後半期に築造され、また鎌倉時代後半、室町時代の遺物が皆無であることから、鎌倉時代の後半までに荒廃が進んだと考えざるをえない。ただし、この築地状施設が平安時代後期よりどの時期まで遡るかどうかについては不明である。また、同時期に調査地東側では径0.3m前後の柱穴群が検出され、何らかの雑舎が想定されるがそれ以上の詳細は目下のところ不明である。

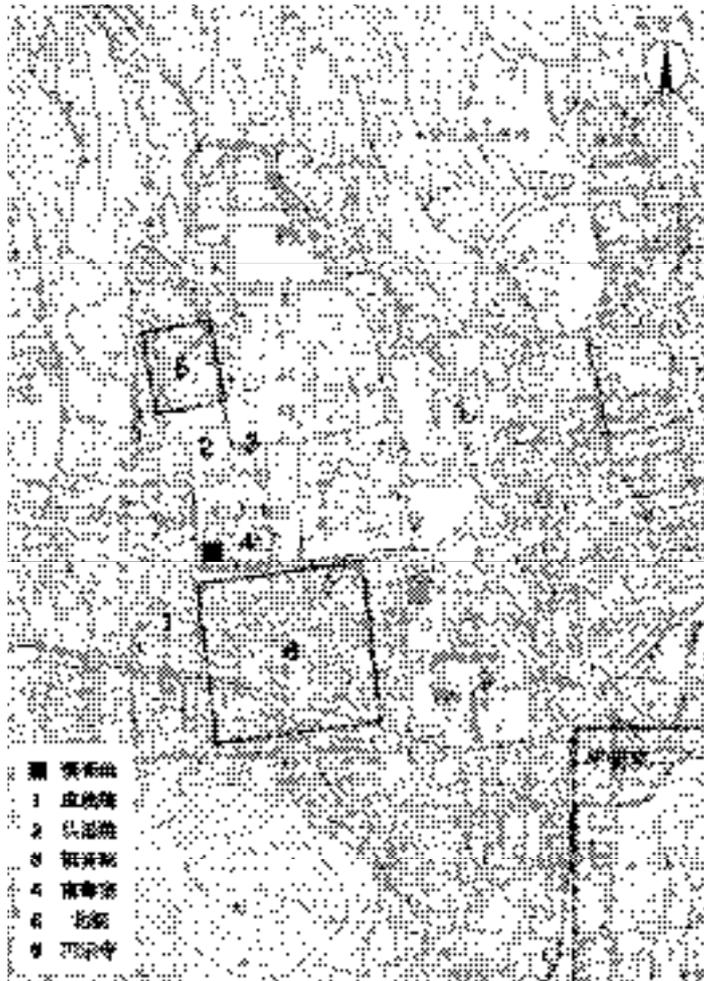
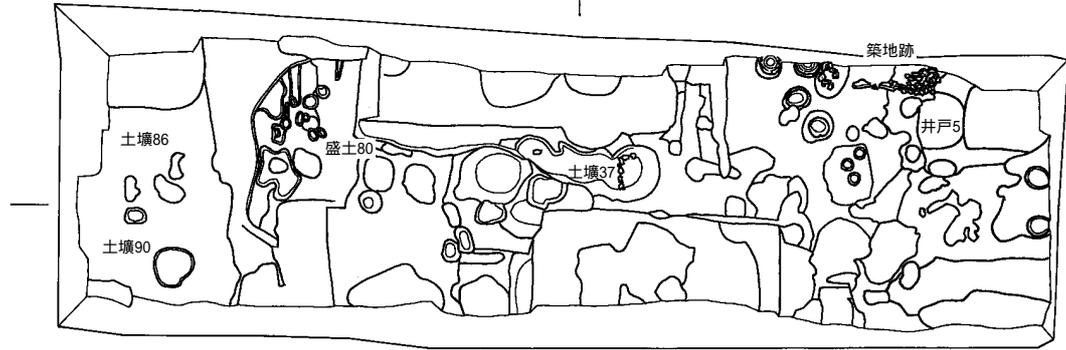


図1 調査位置図及び子院等配置図（1：10,000）

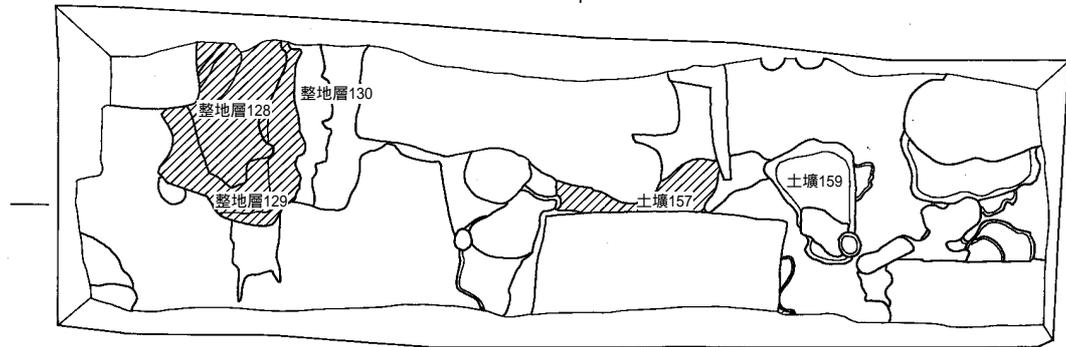
第1面平面図(江戸時代末期~明治時代)

Y=-25,956



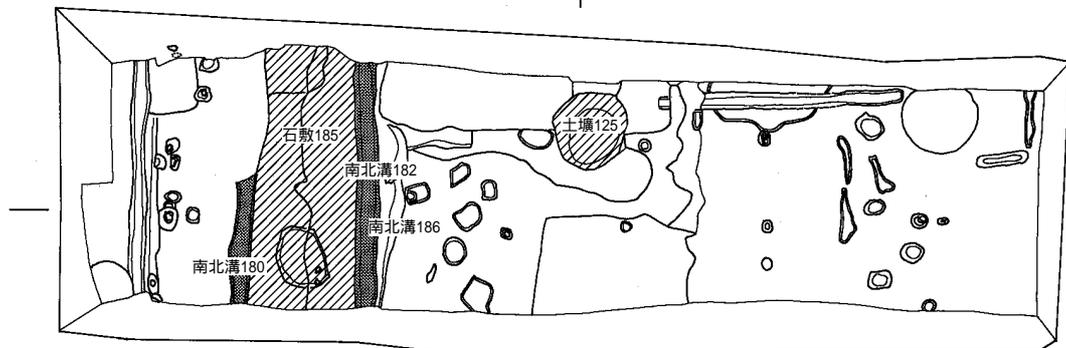
X=-108,112

第2面平面図(江戸時代後期)



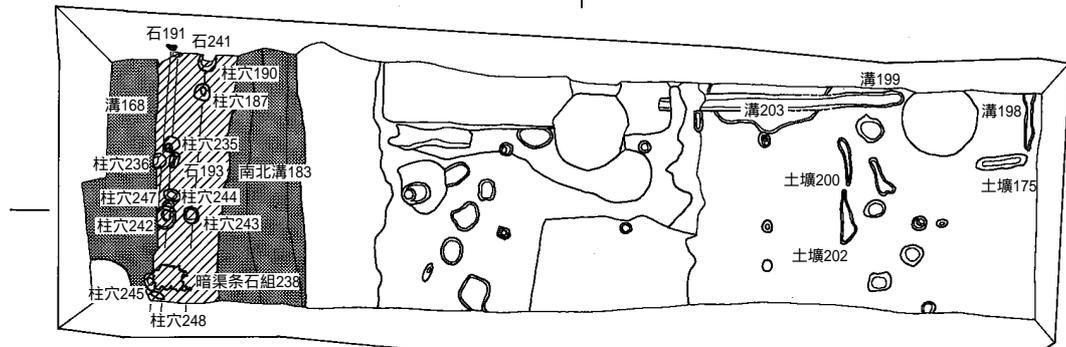
X=-108,112

第3面平面図(江戸時代中期)



X=-108,112

第4面平面図(江戸時代前期)



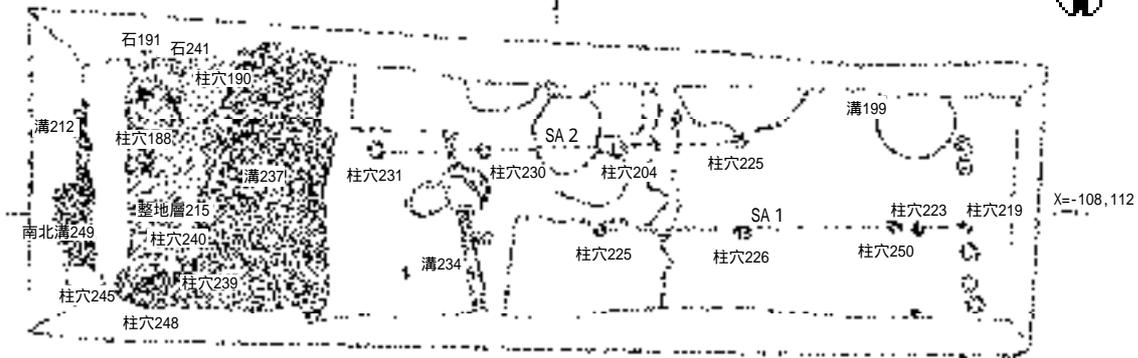
X=-108,112

Y=-25,956

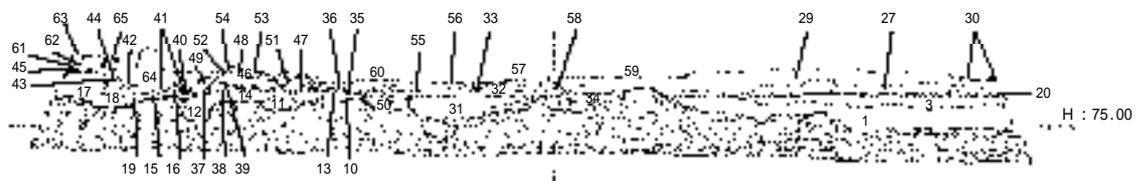
図2 調査地平面図(1:200)

第5面平面図(平安時代後期～鎌倉時代前期)

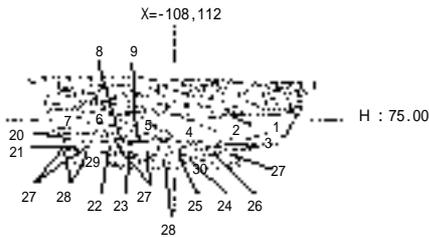
Y=-25,956



調査地断面図(南壁及び東壁)



Y=-25,956



1	10YR5/8	黄褐色砂泥	～ 8 cmまでの礫混	根混	33	7.5YR4/6	褐色砂泥	
2	10YR5/6	黄褐色砂泥	～ 8 cmまでの礫混	根混	34	7.5YR5.8	明褐色粘質土	
3	10YR6/3	にぶい黄褐色砂泥	～ 15 cmまでの礫多く混	ブロック混	35	10YR4/6	褐色砂泥	
4	10YR6/6	明褐色砂泥	～ 20 cmまでの礫混	下部に礫集中	36	10YR4/4	褐色砂泥	
5	10YR7/8	黄褐色砂泥	～ 7 cmまでの礫混	根混	37	10YR4/4	にぶい黄褐色砂泥	～ 3 cm程の礫多量に含む
6	10YR6/6	明褐色砂泥	～ 5 cmまでの礫混	根・炭混	38	10YR5/4	にぶい黄褐色砂泥	～ 5 cmまでの礫混 瓦少量混
7	10YR5/6	黄褐色砂泥	～ 10 cmまでの礫混	根・ブロック混	39	10YR4/3	にぶい黄褐色砂泥	
8	10YR5/8	黄褐色砂泥	～ 10 cmまでの礫混	根混	40	7.5YR4/6	褐色砂泥	
9	2.5YR7/2	灰黄色粘土	～ 3 cmまでの礫混	根混	41	7.5YR6/3	褐色粘質砂泥	
10	10YR4/6	褐色砂泥	～ 7 cmまでの礫少量混	瓦混	42	7.5YR5/6	明褐色粘質砂泥	土師器混
11	7.5YR5/6	明褐色砂泥	～ 10 cmまでの礫混	土師器混	43	10YR5/3	にぶい黄褐色砂泥	炭混
12	10YR6/6	明褐色砂泥			44	10YR4/3	にぶい黄褐色砂泥	土師器・炭混
13	10YR5/6	黄褐色砂泥			45	7.5YR4/6	褐色粘質砂泥	
14	7.5YR4/4	褐色砂泥	瓦・土師器・炭混		46	2.5Y 5/2	暗灰黄色粘質土	
15	10YR4/4	褐色砂泥	土師器・粘土ブロック混	炭少量混	47	10YR4/2	灰黄灰色粘質土	炭混・土師器片混
16	10YR5/4	にぶい黄褐色砂泥	瓦・土師器混	築地に値する	48	10YR4/4	褐色粘質土	瓦・土師器・炭混
17	10YR4/4	褐色砂泥	瓦多量に含む	*江戸後期?	49	10YR4/6	褐色粘質砂泥	
18	7.5YR5/4	にぶい褐色砂泥	炭混		50	7.5YR4/4	褐色粘質砂泥	炭混
19	10YR4/4	褐色砂泥	土師器・炭混		51	10YR4/2	灰黄褐色砂泥	土師器・炭多量に含む
20	7.5YR4/4	褐色粘土	～ 3 cmまでの礫混	土師器混	52	10YR6/4	にぶい黄褐色粘質砂泥	
21	7.5YR5/6	明褐色粘土	～ 3 cmまでの礫混	礫微量	53	10YR4/6	褐色粘土	土師器・炭混
22	7.5YR4/6	褐色粘土			54	10YR7/8	黄褐色粘質土	
23	7.5YR4/6	褐色粘土			55	7.5YR5/8	明褐色砂泥	
24	7.5YR4/4	褐色粘土			56	10YR5/6	黄褐色泥砂	～ 5 cmまでの礫多量に含む
25	7.5YR4/6	褐色粘土			57	10YR5/6	黄褐色粘質土	～ 5 cmまでの礫含む
26	7.5YR4/6	褐色粘土			58	10YR5/6	黄褐色泥砂	～ 5 cmまでの礫多量に含む
27	10YR5/6	黄褐色粘土	～ 3 cmまでの礫混	礫少量	59	10YR5/8	黄褐色粘質土	
28	10YR5/8	黄褐色粘土			60	10YR5/8	黄褐色泥砂	～ 5 cmまでの礫多量に含む
29	2.5YR6/6	明黄褐色砂泥	～ 10 cmまでの礫混	根混	61	10YR4/3	にぶい黄褐色砂泥	土師器混
30	2.5YR6/4	にぶい黄色粘土			62	10YR4/6	褐色粘質砂泥	土師器混
31	10YR4/3	にぶい黄褐色砂泥	瓦・土師器片・炭混		63	10YR4/2	灰黄褐色粘質砂泥	大村混
32	7.5YR4/4	褐色砂泥			64	10YR6/4	にぶい黄褐色粘質砂泥	
					65	10YR6/8	明黄褐色泥	

図3 調査地平面図・断面図(1:200)

### 3. 検出遺構の性格

調査地は仁和寺の現在の敷地の南西端に位置する。今般の調査ではその一帯の変遷の一端を明らかにした。

検出した築地状施設は創建時からの寺域を画する築地の可能性もあるが、明確な遺構・遺物を検出しえなかった。しかし、平安時代後期から鎌倉時代前期には調査地西端に門状遺構を伴う築地状施設が南北にあったことは確実である。平安時代後期に盛行した子院のうち仁和寺の西に隣接する院家は北院、成就院などがある。その子院想定地には、この間の立会調査や木村捷三郎氏の採集資料中に平安時代後期から鎌倉時代前期の遺物が多く採集されている。そのことから想定すると子院との寺域を



築地と門跡（北から）

画する築地状施設の可能性もある。また、室町時代の遺物は皆無であり、平安時代後期に築造してから短期間で機能しなくなったと思われる。

その後、同一の位置に江戸時代前期までに暗渠状石組みを伴う築地状施設が造られる。両側溝の埋土の遺物から17世紀の後半代には埋没していることになる。0.3m大の柱列が少なくとも二時期確認されているので、上部構造は板状の塀だった可能性もある。

そして、徳川家光の時代の寛永期に再建され、天和三年（1683）に成立したとされる『仁和寺伽藍総絵図』に描かれている位置に移築されている。先述した、江戸時代前期の築地内側溝が埋没した後に、その内側溝より東にかけて両側に側溝を伴う裏門からの通用路を築いている。裏門は前述の絵図に既に記載されているから絵図以前のある時期に造られたことになる。おそらく、寛永の再建時のものであるだろう。そうすると、この寛永再建時に西へ6.4m現在の築地の位置まで拡張していることになる。

江戸時代後期以降の調査では、削平・埋立が繰り返されたのか明確な通用路の路面は検出していないが、裏門と通用路の関係は少なくとも明治20年（1887）に作成された『罹災之図』に現されているように踏襲されていると思われる。

### 4. 検出した築地に近接する施設（子院）

今回調査で検出した築地関連施設を文献も含めて検討してみる。そこで、仁和寺の西端の寺域に隣接する施設・子院を抽出してみる。

すでに、杉山信三氏や福山敏男氏、古藤真平氏等の先学の研究によって北院、仏母院、成就院、観音院、南御室などが想定されている。

#### 1) 成就院

まず、この近辺の位置関係のヒントになりそうな記述が『仁和寺諸院家記』< 三四六～七・三九四>にある。それによると、「光臺院御室御灌頂記云、一条大路西行南折、円宗寺南大路西行、成就院東大路北行西折、馬場北行、到仏母院西門（後略）」とある。これについては杉山氏や古藤氏の記述に詳しい。ここでは、円宗寺より西であり馬場を北院の所属と仮定して、その南に位置することになるとされている。また、仏母院は成就院の北もしくは北西方向に位置することまではわかる。しかし、「円宗寺南大路西行 成就院東大路北行」とあり、円宗寺と成就院との位置関係が西もしくは西北まではわかるが、それ以上の詳細は不明ということもあり、円宗寺の寺域と規模が把握される事が必要である。

## 2) 円宗寺

杉山氏は『杉山氏著書』において『本朝統文粹』< 卷第十一所收 円宗寺鐘銘>の記述<sup>(7)</sup>、すなわち「(前略) 扱地於仁和寺勝形之左、卜処於古先帝山陵之前(後略)」と、供養の願文である『扶桑略記』延久二年(1070)十二月二十六日条の「(前略) 仁和寺之南傍、有一吉土(後略)」の解釈から仁和寺の東南の御室小松野町付近を比定されている。一方、福山氏は古い時代の北院を住吉社の南に設定することを前提に、『兵範記』仁平三年(1153)三月二十七日の記述にある後白河院の第二皇子(後の北院御室守覚)が北院へ到る道筋、『自一条末又西行、経円宗寺南西両面、着御北院』の解釈から現御室小学校付近を想定されている。古藤氏は鐘銘の記述と齟齬を生じる点を指摘した上で『京都嵯峨野の遺跡』が想定する仁和寺南西部を採用されている。ただし、『杉山氏著書』では仁和寺の西南に位置する可能性も示唆されている<sup>(8)</sup>。

ところで、福山氏の唱える仁和寺東辺の北院は古い時代のそれであり、それに依拠して、延久二年(1077)供養の円宗寺の故地を比定されている。本稿は平安時代後期～鎌倉時代の施設を対象としているので、古い時代の北院とそれに基づく諸説はここでは取り扱わない。

そうすると、古藤説・『京都嵯峨野の遺跡』説と杉山説が浮上するが、選択すべきその他の資料を現段階では知らない。いずれにせよ、三者の説は概ね西、東にスライドする関係にあり、先述した『光臺院御室御灌頂記』で迎れる。しかし、現段階では考古資料の『京都嵯峨野の遺跡』に依拠することにする。

したがって、つぎは「到仏母院西門」で迎る仏母院の位置を検討してみたい。

## 3) 仏母院

仏母院を『本寺堂院記』< 二九三>で検討してみる。

まず、仏母院の構成について、「仏母堂、廊、供所屋、西門」より構成されている。その特徴は小規模である。『本要記』< 三三三>では「東西廿間、南北卅間」としている。

次に、「鳥羽院御建立 在于観音院灌頂堂之西」とあり、仏母院は観音院の灌頂堂の西としている。すなわち、灌頂堂と東西関係にあるという。

また、仏母堂を西、灌頂堂を東にして『廊』でつながっている『傳法灌頂指図』がある。『院の

御所と御堂』PL21-1での指図は江戸時代のものであるというが、顕證<sup>(9)</sup>が高山寺所蔵のものを書写したものである。同様なものとして、『同書』148頁において「(4) 傳法灌頂指図」を紹介されている。これは、江戸時代のものであるが、元暦元年(1184)後高野御室が灌頂を受けた時の写しとされている。以上のことより、仏母院と灌頂堂は西と東の関係で鎌倉時代においても「廊」でつながっていたと想定される。

仏母院の位置であるが、『本寺堂院記』< 二九四>の指図によると仏母院西門の南北に「築地」があることが留意される。また、「廊」でつながっていたという記述から異なる名称の院でありながら、二つの堂は密接な関係にあったということになる。そうすると、北院が本寺の西に隣接している関係から、両者は本寺の外、ではなく内側に位置したと考えたほうが整合性がある。すなわち、上記仏母院の指図にある(西側の)築地が当時においても本寺の寺域を画する施設であったと考えられる。また、『本要記』< 三三三>に『寛永年中再興之時、此敷地為御所之内了』とあるが、少なくとも応仁の乱以降は荒廃していたのだから、『寛永年中』になってはじめて、『為御所之内了』とは限らないが、仏母院の規模からしたら、今般の調査で寛永期に寺域を西に拡張したことに伴い、荒廃していたであろう仏母院が『為御所之内了』したことも想定される。

#### 4) 観音院

両者の位置を更に限定するために、仏母院の東に隣接する灌頂堂を含む観音院の位置について検討してみる。

観音院の故地について、杉山氏は南御室が観音院になったことを前提に、故地は本坊とされている。『杉山氏著書』37～46頁に詳しい。福山氏は「現在の仁和寺本坊の東、円堂跡の西で中門の南、南大門(仁王門)の北の広場」を想定されている。『福山氏著書』104～113頁に詳しい。これに対して、古藤氏は金堂の故地が現金堂より東南に位置することを前提に、観音院が南北に長い堂塔の配列であることを根拠に観音院を現伽藍の西部に、南御所を現本坊に推測されている。

杉山氏の説に対して、観音堂と南御室の関係で古藤氏は以下のように記述されている。それによると、宇多法皇の御所としていたものは仁和寺寺域内の西端にあった。それを敦実親王が宇多法皇から託され、仏閣としたのが観音院とする。また、その南に隣接していた施設は南御所と称した。したがって、南御所と観音院は別物で、南北関係にある。『光臺院御室御灌頂記』(『大日本史料』第四編之十二所収)から『大アサリ<御装束如受者>出御南御室北門、経観音院南東・・・』という記述も併記されている。

福山氏の説について古藤氏は両院を別々に求める福山氏の説に賛意を示されている。ただし、その場合南御室は現伽藍の外になり、円宗寺の比定地との関係が問題となるとされている。その上で、古藤氏の故地推定地について述べられている。

古藤氏の説においては、観音院の西に位置するはずの仏母院は、北院(古藤氏は北院について『京都嵯峨野の遺跡』の考古成果に依拠されている)の東隣りにあたることになり、『光臺院御室御灌頂記』にしたがえば、北院の付属と想定される「馬場」を北上したところに「到仏母院西門」

とあるから、北院の南方向に位置するはずの仏母院と齟齬が生じる。

そこで、南御室を寺域の南西隅に置き、北隣りに観音院を配置しても、平安時代後期～鎌倉時代前期とは多少規模が異なるにしても、本坊の規模（『罹災図』〈明治二十年五月二十日夜〉では南北百〇四間、東西四十六間としている。）からしても、『葉黄記』暦仁元年（1238）六月廿三日条の「当観音院西北有喜多院」によって観音院の西北に位置するとされる北院との関係も落ち着く<sup>(10)</sup>。

#### 5) 北院

観音院の「西北方向」にあるという北院はその故地をどこまで限定できるのであろうか。

すでに円宗寺の項でも触れたように、福山氏は古い段階の北院を別途設定し、仁和寺の東、龍安寺玉津芝町か龍安寺塔ノ下町、すなわち現住吉社の南付近を提唱されている。しかし、新しい段階においては西の北ノ院町を推定し、この点については三者とも一致している。

本稿で扱う時代は平安時代後期から鎌倉時代であるので、ほぼ平安時代後期以降の存在と思われる、仁和寺北ノ院町にあったという北院を取り扱う。

北院の位置については以下に記述する以外には、詳細史料を目下のところ知らない。すでに、何度も引用している『光臺院御室御灌頂記』は北院そのものの記述はないものの「馬場」という表記があり、これを北院の馬場と諸氏もみなしている。また、円宗寺の項目でも取り扱った『兵範記』仁平三年（1153）三月廿七日丙辰条<sup>(11)</sup>の『自一条未又西行、経円宗寺南西両面、着御北院』がある。円宗寺の南面を通り、西面を北上した方向に北院があることは福山氏の古い時代の北院、仁和寺東辺説の

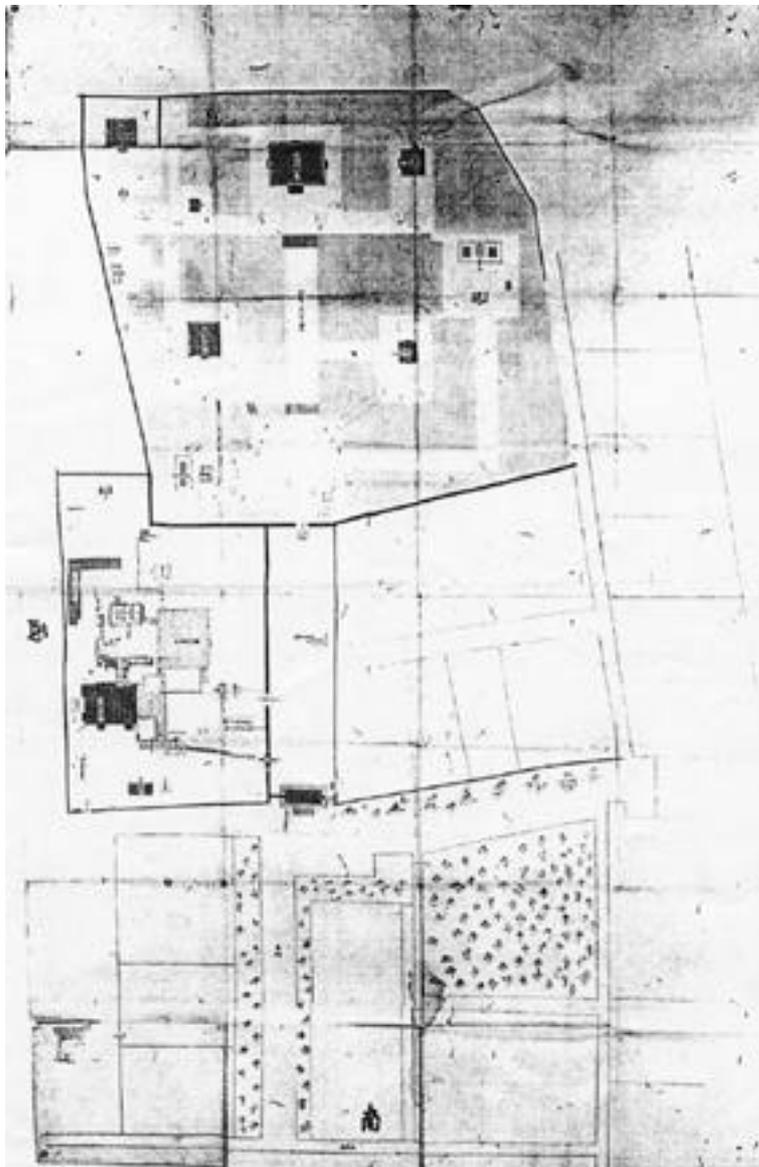


図4 天和年間境内図

如何にかかわらず、成り立つ。

また、杉山氏らは『百鍊抄』長治三年（1106）二月二十八日条、『中右記』同年同月十九・二十八日条において、北院の再建時に光孝天皇陵の東辺を破壊する事件について記されている。これにより、北院は光孝天皇陵の東に隣接していることがわかる。その他の記述から考えて現在の光孝天皇陵の位置とは矛盾することも指摘されている。

以上から、北院は仁和寺の西北部に位置することが想定される。しかし、それ以上の詳細はわからない。先述したように、考古資料として木村氏採集の平安後期の瓦群<sup>(12)</sup>や立会での遺構遺物の存在を考えると、現段階では『京都嵯峨野の遺跡』の推定地に依拠することとする。

## 5. まとめにかえて

ここでは、『光臺院御室御灌頂記』でのルートを中心にまとめてみる。北院の付属と想定される「馬場」を「北行」すると、「仏母院西門」に到るということになる。そうすると、成就院は北院の南ないしは、南東方向にあったことになる。また、北院にいくまでに「馬場」を「北行」方向に仏母院の西門に遭遇することになる。したがって、仏母院も北院の南東よりのところに位置することになる。

仏母院は観音院の北端に位置する灌頂堂と西・東の関係にあるから、観音院も仏母院の寺域分東にずれて、北院の南東方向に位置することになる。

また、仏母院の西門の南北には「築地」があるからには大きな区画が想定される。（北院）の「馬場」を「北行」して、仏母院の西門に至る位置としては、北院に至る前に、仏母院の西門が『光台院御室御灌頂記』で辿ると右手（東側）に見えてくる位置にあるという光景を復元できる。北院を『京都嵯峨野の遺跡』の想定する位置に設定すると、その南、本坊の西北の角に近い所の寺域に想定されよう。

調査地の西、西北には上記の成就院、北院があり、東もしくは東北あるいは北方向には南御室、観音院、仏母院がある。そうすると、検出した門は調査地に近隣の諸施設や子院との非公式的な用足しなどに、あるいは鳴滝などに展開する諸院家との通行に「裏木戸」的な通用門として機能していたのであろう。

## 註

(1) 本調査の詳細は以下の報告書を参照のこと。

『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2001年度刊行予定

(2) (財)京都市埋蔵文化財研究所による、この間の仁和寺及びそれに関連する埋蔵文化財調査で、1994年度までの成果は以下の報告書に収められている。

『仁和寺境内発掘調査報告 - 御室会館建設に伴う調査 - 』（財）京都市埋蔵文化財研究所調査報告第9冊 1990年

『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 - 』同第14冊 1997年

本稿では、これらをそれぞれ『仁和寺境内発掘調査報告』、『京都嵯峨野の遺跡』と呼称する。

(3) 杉山信三氏の仁和寺に関する研究が含まれているものには以下の著書がある。

「仁和寺の院家建築」『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年

「仁和寺の院家建築」『院の御所と御堂 - 院家建築の研究 - 』奈良国立文化財研究所学報 第十一冊  
1962年

前者を『杉山氏著書』、後者を『院の御所と御堂』とそれぞれ略記する。

また、福山敏男氏の仁和寺に関する研究成果には以下の論文がある。

「仁和寺の創立」『福山敏男著作集・三 - 寺院建築の研究・下』中央公論美術出版 1983年

(『日本古代学論集』平安博物館記念論文集編集委員会編 1979年)における同題の論文の再掲。

以下、これを『福山氏著書』と呼称する。

古藤真平氏の仁和寺に関する最近の研究には、以下の論文がある。

「仁和寺の伽藍と諸院家(上・中)」『仁和寺研究 第一・二輯』(財)古代学協会 1999・2000年

(4) 『仁和寺史料 寺誌編一・二』奈良国立文化財研究所編 1964・1967年

この史料については、以下のように取り扱うこととする。寺誌編一の『仁和寺諸堂記』の一三六頁の記述については、『仁和寺諸堂記』< 一三六 > と表記することとする。

(5) 『罹災之図』明治二十年五月二十日夜と記載されており、「罹災」前の境内の堂宇を描写している。

(6) 仁和寺蔵。総本山仁和寺 小林弘侑氏より史料使用の快諾を得ました。

(7) 『本朝続文粹十一』「円宗寺鐘銘条」国書刊行会 1934年

(8) 杉山氏著書の『第三章 仁和寺の院家建築』の註14では、以下の補足がなされている。

「『仁和寺諸院家記』裏書に「円宗寺図」というのが掲げられている。原本は、仁和寺文書の中に見当たらなかったため、図の内容がどれほど正確なものかわからない。建築に関する限り、依拠すべきものでないが、境内の周辺を書き込んだ状況をとるとすれば特に南側、西に寄せて「塚在之」というのは、鐘銘の古先帝山陵にあたり、また、東側に「南北に馬場在之」は仁和寺本寺のもので、北院にもあった馬場ではないと考えれば、円宗寺は仁和寺に向かい左の位置を占める。」

(9) 顕證は、慶長二年(1597)十二月二十二日から、延宝六年(1678)二月十三日の人物である。一音坊顕證ともいい、寛永年中に仁和寺再興が図られたがその際活躍し大任を果たした。また、『仁和寺史料』の「仁和寺諸院家記(顕證本)」・「本要記」・「本寺堂院記」や復興造営の参考資料にしたとされる洛中洛外の諸寺伽藍図など多くの業績を残している。

(10) 「葉黄記 第一」『史料纂集』続群書類従完成会 1971年

(11) 「兵範記一」『京都大学資料叢書1』京都大学文学部国史研究室 思文閣出版 1988年

(12) 『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年